

苗木城の歴史と遠山氏

苗木城は、1868年の明治維新で苗木領（現在の岐阜県南部）が解体になるまで、遠山氏の本拠地だった。一族の元々は加藤姓で、鎌倉幕府を開いた源頼朝（1147-1199）の家臣、加藤景廉（1156-1221）にまで遡る。中津川市の南にある標高2,191メートルの恵那山にちなんで、一族が遠山姓を名乗るようになったのは1195年のことである。当時、恵那山は遠山と呼ばれていた。1526年、一族は木曾川と中山道の要衝に位置する木曾・飛騨地方を支配し、美濃東部に勢力を拡大するため、高森山を城地に選んだ。

戦乱の世を生き抜く

1526年、遠山昌利は苗木領の行政の中心として苗木城を築いた。織田家と遠山家は密接な関係にあり、苗木城は敵対する甲斐国（現在の山梨県）の武田家に対する重要な防衛拠点と考えられていた。

織田信長（1534-1582）は、戦国時代（1467-1568）に終止符を打った「戦国三英傑」の筆頭である。信長が京都の本能寺で信頼する武将、明智光秀（1528-1582）に討たれた後、豊臣秀吉（1537-1598）は信長の後継者として天下統一を目指した。秀吉に忠誠を誓わなかった遠山家は、秀吉の將軍、森長可（1558-1584）によって城を追われた。

森家は川尻秀長を城代として据え、遠山家は尾張国の徳川家康（1543-1616）の元に身を寄せた。家康はやがて1600年の関ヶ原の戦いで秀吉とその同盟軍に挑み、天下統一を成し遂げる。その直前、家康は苗木城と旧遠山領を奪還するため、当主であった遠山友政を派遣した。1600年の関ヶ原の戦いで川尻城主は戦死し、家康が勝利した後、苗木城と領地は友政に与えられた。以

後、1871年に体制が変わり権力を失うまで遠山家が12代に渡り苗木領を治めた。

平和な時代の統治

平和な江戸時代には、多くの山城が廃城となり、平城が好まれた。遠山家はこの誘惑に負けず、代々築いた城を守り続けた。江戸時代（1603-1867）、中津川は交通の要所だった。木曾川に隣接し、江戸（現在の東京）と京都を結ぶ五街道のひとつ、中山道の45番目の宿場だった。尾張領と美濃国を結ぶ陸路と川路の両方を支配していたため、この領地は戦略的に重要だった。

苗木は、城を持つ領としては最小の領のひとつであり、領の石高は1万石（約5万ブッシェル）と比較的控えめであった。石高とは、徳川幕府が課税のために地価を決定するための体系で、米の単位である石高で表される。一般的に1石（米5ブッシェル）は1人が1年間食べるのに十分な米と考えられていた。

時代の終わり

最も貧しい領のひとつであった苗木領は、厳しい財政状況に直面し、自給できる米を作るのに苦勞した。1871年（明治4年）に廃城となり、木材やその他の価値のあるものは競売にかけられ、領の累積債務の返済に充てられた。